

わたしたちは、日々の暮らしのなかで頻繁にモノを与えたり、もらったりしている。そのなかには生きていくうえで、もっとも重要な食物も含まれている。霊長類学者によるとヒトやボノボなど一部の霊長類を除いた動物は、自分の食物を他の個体に与えたり、交換したりすることはほとんどないという。すなわち、食物を含めたモノの贈与や交換は、人間に特徴的な行動のひとつであるようだ。

では、なぜ人間だけがモノを贈与し、交換するのか。その理由は、人間がほかの動物とは異なり、進化の途上で言語能力に基づき記憶力や思考力を特段に発達させてきたことに関係があるという。ここでは、他の人に物品や金銭を与えることを意味する贈与について考えてみよう。

日本のお中元やお歳暮の慣行、誕生日のプレゼント、入学祝などには、贈与の一例である。通常、贈与を受けた人は、いつか贈り手やその家族に、機会をみて何かをお返しすることが多い。お返しをすれば、特定の社会関係は続き、お返しをしなれば、その関係は断絶してしまうかもしれない。また、贈与は贈り手や受け手の思いや願いを前提としていたり、うれしさなどの感情を生み出したりする。

マルセル・モースは、『贈与論』において北アメリカ北西海岸に見られたポトラッチとよばれる過激な贈与儀礼やトロブリアンド諸島におけるクラ交易などの事例を比較検討した。その結果、世界各地で見られる贈与とは、贈る義務、受け取る義務、

## 贈与 Gift

ましがみのぶひろ 岸上 伸啓 民博 研究戦略センター

### 人間学の キーワード

わかりあいたい

そして返礼する義務からなる義務的贈答制（義務的で拘束的な交換行為）であると考えた。そしてなぜ贈ったモノが贈った本人と同じモノや違ったモノとして戻ってくるのかを説明しようとした。

モースは、モノには最初の所有者の霊的な力が宿っているの、他の人に渡った後も、もとの所有者に戻って来ることを望むからだと言明した。さらにモースは、贈与は経済的だけでなく、同時に社会的、政治的、宗教的、道徳的な現象であると主張した。彼はこのようなひとつの属性に還元できない現象を全体的社会現象とよんだ。

贈与は、モノを与えることであり、見かけ上、モノの一方的な移動である。しかし、モースの研究以来、贈与は時差のある交換であり、社会的連帯の形成や維持に不可欠な社会的行為であると見なされるようになった。

最近、贈与が再び注目を浴びている。それはグローバル化した現代社会においても贈与的な行為や現象が認められるからだろう。たとえば、災害に遭った地域や貧困地域の人びとを国家や国際機関、開発NGO、一般市民が支援をすることや、人命を救うための移植用臓器の提供、親が小さな子どもにみせる無償の愛などさまざまな例をあげることができる。これらの行為や現象を贈与のひとつと見なし、理解を試みることは可能であろう。人間は、なぜモノを他の人間に与えるのか。贈与行為の研究は「人間とは何か」を解明するための鍵になるにちがいない。